

---

# 繋ぐモノ

れん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

繋ぐモノ

### 【Zコード】

Z4342Y

### 【作者名】

れん

### 【あらすじ】

樋田 玲哉、十六歳の高校二年。

昔から、人ならざるモノが見えた。

周りには気味悪がられ、自分は異質なんだと認識する。

そしてそんな体质から、ウラの世界を知つてしまつ。

「両親は？」

いない。

「なんで？」

知らない。

「どんな人？」

わからない。

忘れてしまったんだ。

まるでそこだけを切り取られたかのようだ。  
まるで穴があいてしまったかのように。

これは、ウラの世界で強く生きる、ウラの会社員である青少年たち  
の物語。

これは「小説＆まんが投稿屋」にも投稿している作品です。

## ウラの人間

裏とは、表の反対。

世界で例えるなら、表とは俺が昨日まで居た場所のこと。裏とは昨日から引きずりこまれた、表とは全く別に見える場所のこと。更に言うなら、裏の世界は表の世界とは表裏一体のような場所で、俺はそのことに関して驚いた。

別に裏の世界が異世界だと言いたいわけではない。ただ?ここ?は昨日とは違う。

ただし俺限定。他の人にはわからない、俺だけが見える裏の世界。表は裏によって創られた、表は裏がなければ存在できない。まさに言葉通りだった。

\* \* \* \* \*

事の始まりは、昨日の晝。

学校の屋上にいた俺は、大きく大きく欠伸をした。

「眠い」

独りでに呟いた。

屋上に誰も見当たらないのは、今は授業中だからだ。サボりではない、既に欠席扱いなのだ。どうせ学校にいたつて楽しい訳じゃない。

ふと屋上の隅に視線を向けると、黒い煙のようなモノが浮いていた。ふよふよと漂つては消える、あれらはそういうモノだった。そしてあれらは他の人には見えない。見えるのは俺だけだ。

それは俺が十六年間生きてきた中で学んだ、精一杯の結果だった。裏を返せば十六年間で知ったのは、それだけのことだと言っているやうなものだが。

黒い影のようにも見えるモノは、もつと言えば闇のようにも見える。もしかしたら、本当の闇とはああいうモノを言つただろか。

見えるだけで知らない。

あれらが人間に害を及ぼすモノなのか、そうでないのか。それさえわからない。

俺は隅で漂う『闇』に舌打ちすると「あっち行け」と言って舌打ちをした。傍から見れば、独り言を言つて何もないといひて舌を出す、精神がおかしい可哀想な奴である。

「触つても害はないのかねえ・・・」

物心がついた頃には見ることができた『闇』、俺の中では当たり前の存在だった。

これが周りにも同じように見えるといつも信じていた。

それなのに周りの人々は口々に言つ。

「こいつ、何言つてんの?」と。

そこで悟つてしまつた。

おかしいのは俺で、正しいのは周り。周りにとつて俺は、嘘を言つてゐる　あるいは気味の悪い奴でしかないのだ。

それを知つてからは関わりを持つこともなかつたのだが　　・・

最近頻繁に見るやうになつたそれらを見ると、興味が湧くのだ。これらは一体何で、どうして存在しているのか。

触るのにも躊躇つていたのだが、そろそろその我慢も限ってきた。

「ちょっとだけなら、いいかな」

どこにも制する者はいない。咎める者もいない。だって周りは見えないのだから。

軽快な足取りで近付き、ふよふよと浮かぶ『闇』の前で膝をつく。そつと手を前に伸ばし、黒い煙のようなそれを指先で触れる否、触れようとした。

「オオオ

「ツ・・・え、何・・?」

触れようとした瞬間だ。それがいきなり炎に包まれ、熱さのあまりに反射的に手を引いた。

「キイイイイ」と耳を劈くような、手を覆いたくなるような『音』を出すと、それは炎と共に跡形もなく消えた。

何が起きたのかと目を丸くして辺りを見回すと、ガガッと壁上のフレンスが揺れた。

そしてフレンスに手がかかり、ヒヨイツと音がつきながら軽い動きで、俺より一回りくらい大きい体格をした誰かがフレンスの上に乗った。そこは見るからに男で、柔らかい栗色の髪をした、俺より三つ四つくらい年上の男だった。

特徴的なのは髪型で、栗色の髪の左側だけを後ろに上げてピンで止めているという、実に個性的な髪型だったのだ。

男はニヤリと意地悪そうに笑うと、額に血管を浮かばせていた。

「やあ、つと見つけたぜ? 手こずらせやがってよ。これじゃ、ハクにまた何か言われるぞ。どうしてくれんだ? ああ! ?」

男は笑つてはいたが、あきらかに怒っていた。怒っている相手は、

先ほど俺が触りつとしていた『闇』らしいが、もうそれには何もない。

あれは炎で燃えるのか、と思い「また賢くなつたな」と男に聞こえないように咳いた。

男はまだイライラするようで、フェンスに一、二回拳を叩きつけると息をついた。

「それより、下から人……?どうやつて……」

男がフェンスに拳を叩きつけていた間、俺はと言うと固まっていた。最初は冷静に物事を分析していたのだが、考えれば考えるほどに不可解過ぎて文字通りパニックに陥り、体をピクリとも動かさずに固まっていた。

何故つてここには屋上で、この学校は四階建てだ。

つまり、この男はこの四階建ての学校の壁を登つて屋上に来たことになる。何せ、男はフェンスの向こう側から来たのだから。

俺が無意識に咳いていた言葉を聞き、男はビクリと体を震わせた。  
「あ? ここいつ、俺が見える? ……いや、あり得ないな。さて帰るか」

だがそのまま帰ろうと、踵を返してジャンプする態勢になる。

つまり、こちらから見れば自殺に等しい訳で ……

「え、待つて待つて、早まるな! ! 」と言つて必死に男の服を引っ張つていた。

男は「うおー? 」と声を上げると俺が引つ張つた方向に倒れた。だが、人間と思えないような動きでクルリと回転すると、ストンと綺麗に着地したのだった。

「だ、だめだろ。まだ自殺なんて……! 」

「自殺？」

男は訝しげな顔を浮かべて俺を睨んだ。男の視線が痛いのはこの際  
気にはしない。

俺は必死に男の自殺を止めるべく、現状整理を試みていた。

「自殺だろ？ここ四階だぞ？何考えてんだよー！」

俺は尚も必死に男に怒鳴りつけると、男は眉を潜めた。

「まだ若いんだしさ、命を大切に」

「つうかさ」

男は俺の必死な説得を綺麗に遮り、問題発言となる言葉を発して  
いた。

「お前、何で俺が見えんの？」

こうして俺はウラの世界に引きずり込まれたのだ。

## ウラの人間（後書き）

こんにちは、れんです。  
まだまだ未熟者ですが、これから頑張っていこうと思います。  
よろしくお願いします。

## ウラの能力

誰か嘘だと言つてくれ。

生まれてこのかた、幽靈なんて見たことがない。

黒い煙のようなモノは散々見てきたが、どれも人間の姿にはなれなかつたし、喋りもしなかつた。世の中に、一般の人を見ることができないモノがその『闇』以外に存在することを知らなかつた。

また一つ賢くなつた。と、冗談はさておき、現状整理をしてみよう。

目の前に立つ男が俺を睨み、今俺は絶体絶命。

この男は先ほど、触ろうとした『闇』を燃やしたと思われる。炎を発生させたのがこの男とは限らないのだが、行動といい、タイミングといい、多分俺の予想は正しいだろう。

『闇』に触ろうとしたから罰が当たつたのだろうか。そうでないといいなあ、と思っていると、男は更に眉を潜めてこいつ言つ。

「なるほど、素材リツツか。しかも性能がよそそうだな」  
「リツ・・・ツ・・?」

聞き慣れない言葉を口に出しながら俺の顔を覗きこむと、男はふいと踵を返し再びフェンスに飛び乗る。

そして顔をこっちに向けると「近いうちに迎えに行くから待つてろ」と意味深な言葉を残して屋上から飛び降りた。

もちろん、俺の目の前で。

何度も言つがここは屋上だ。

いくら相手が人間じゃない（仮）としても、心配してしまつのが俺

の性格。

急いでフェンスに手をかけると、体を乗り出して下を見る死体なんてあるわけもなく、あの男は忽然と消えていた。

が、

「なんだ・・? 今の・・・」

そう呟くこと以外、今の俺にはできなかつた。

暫くぼうっと突つ立つてゐると、背中にトンと衝撃があつた。ハツと我に返つたように後ろを振り向くと、友人の優樹ゆうきが手をひらひらさせて笑つていた。

「また、なんかいたのか?」

こいつは俺の最大の理解者である、唯一の友人だつた。

俺の変な(見えるはずのないモノが見える)体質を知つて尚、笑つて隣にいる奴だ。

幼馴染で幼い頃から何かと支えてくれたのだ。俺は優樹にしてもしきれなない程の感謝をしている。

「ああ、まあ」

だからこそ言えない。

今までとは違う、人間の姿をした幽霊(仮)に会つてしまつたなんて。

そしてそいつに「近いうちに迎えに行く」宣言をされてしまつたなんて。

そんな宣言、冥土へ連れて行くとでも言つているようなものだ、幽霊なんだから。

それを聞いたら優樹は絶対、俺を助けようと首を突つ込む。

これは单なる直感だが、巻き込んではいけない気がした。

巻き込んでは優樹が危ないと、そう感じたのだ。

「ま、気をつけなよ？玲哉が相手にしてる奴らは皆、危険がないなんて言えないんだからさ」

「わかつてらあ

心配をしてることはわかる。優樹は昔からそつとつ言つ奴だから。超お人好しで、笑顔を絶やさなくて、俺の隣でいつも馬鹿をやって。そんな優樹にいつも救われた。

だからこそ俺のことには巻き込みたくない。その想いは強く、俺はぶつきら棒に答えた。

優樹は俺の返し方に納得はいかないようだったが、それでも干渉しまこと「じゃあね」と行って屋上を出た。

俺は優樹の背中を見つめ、やがて目を伏せた。

\* \* \* \* \*

「この学校に、ですか？」

「そうだ、屋上にいた

会話をするのは、先ほど玲哉の前に現れた特徴的な髪型をした男と、幼さが残る顔に小柄な体型の少年。少年は顔の割に大人の雰囲気を漂わせ、仕草や口調がやけに大人びていた。

その隣では黒髪に眼鏡をかけた少年が、男と少年の会話を聞いていた。

「僕は反対ですよ、何故オモテの人間を僕らの仲間に  
ド・ライ  
鬼衆に入れなければいけないんですか？ オモテの人間？ なんか？ が

生き延びられるはずがない

「そつは言つてもなあ、『あれ』は相当良い素材だぞ？」

「黙つてください、役立たず。貴方のせいです、ミツたちと合流し損ねたんですよ？」

「やツ・・役立たずだと？ オイ、ハク・・・お前、今すぐ焼き殺し

てやるうか

「やれるものならやってみてください。カナちゃん？」

ハクと呼ばれた少年は実にわかりやすい挑発をし、男 カナは易々とそれに乗ってしまった。

全てはハクの思うつぼである。

カナがあきらかに一見で年上だとわかるのだが、これではどっちが大人なのかわかったものではない。

眼鏡をかけた少年 サトは、おもむろにため息をつくと、二人の間に割って入った。

「ちょっと、今は任務中だよ？」

「チツ・・・」

カナは派手に舌打ちをすると、ふいっと顔を背けた。

一方ハクはつまらないと言つたような顔でサトに顔を向けた。

いつも通りだ。ハクとカナはいつもこんな感じなのだ。

顔を合わせてはハクはカナをからかい、カナはそれに腹を立てて喧嘩が始まる。

それを止めるのは周りにいる人間なのだ。

ハクは冷静さを保つているが、喧嘩 자체を楽しんでいるのだから、周りはいい迷惑だ。

二人の様子にサトは「まったく」と再びため息をつくと「それじゃあ」と話を切り出した。

「素材のことはハクに任せた。カナは僕と一緒に本部に戻ろう」リラック

「・・・わかった」

「わかりました」

カナはまだ不満そうに顔を歪めるが、どうやら異論はできそうにな  
い。

サトは既に歩き出し、ハクはもうどこにも見当たらなかつた。

相変わらず行動が速いな、と思つてゐると、サトが振り返つて「早くしてよ」と催促した。

カナは返事をしてサトに追いつき、一人並んで歩いた。

「それで? どうなの、実のところ」

「素材リソツのことか?」

「そう。能力デルタは判明してるの?」

「してねエ、けどなんか・・・違エんだ」

「違う? 何が?」

サトは首を傾げた。

カナの雰囲気が少し違つエ氣がしたからだ。

カナは目を逸らして口を開エざしていたが、やがてふうっと息をついて口を開いた。

「それがな  
」

\* \* \* \* \*

眠くなつてきた。

あれからすぐに寮に戻り椅子に座つていたのだが、寮に戻つても何もすることがなく、日の光に当たつていると段々と暖かくなつくる。

さすがに眠気には耐えられず、ベッドで吸い寄せられるように歩いた。

## カタン

静まり返っていた部屋に突然響いた物音、俺はピタリと足を止めて辺りを見回す。

するとそこにいたのは茶髪の少年、幼顔で俺より年下に見える。少年は一階建ての寮の窓の外から悠々と入り、何事もなかつたように俺に話しかけた。

「あなたが、<sup>リツツ</sup>素材ですか？」

「デジャヴと思いながら少年を見る。

多分こいつもあの男と同じ類なのだろう、四階建ての屋上から落ちても平氣だった（多分）あの男と。

そしてまたもあの男と一致する。あの男が言つた言葉、『リツツ』とは一体なんなんだ？

「リツツ？ セツキの男、お前の仲間か？」  
「力ナのことですか？」

少年は途端に眉を潜め、嫌そうな顔をする。

どうやらあの男は力ナと言うようだ。

「あの役立たずなら帰りましたよ、それよりやはり僕の姿が見えるんですね」

少年のやけに大人びた口調に息を呑む。

男 カナを？ 役立たず？ とハツキリ言う辺り、この少年はカナを見下している。

暫くすると、少年の雰囲気が変わった。

こんなに顔立ちは幼いのに、その瞳から見える光は鋭く、冷たい。こんな目、大人にだつてそうできるものじゃない。

この少年は一体何なのだろうと思つていると、少年はクスクスと笑

つた。

「 . . . 死ね」

ガツと俺は床に押さえつけられた . . . と言つても、少年の手によつてではなかつた。

何も無いのだ。

何も無いのに俺は床に押さえつけられた。

「ぐ・・・う・・・」

苦しくて声が漏れる。

首を絞められている、でも見えない。何に縛められている? 何に俺は殺されそなんだ?

恐らく犯人は、目の前で微動だにせず怪しく笑う少年、こいつがそうさせているのだろう。

力ナガ炎を操つたように、この少年も。

体がどんどん動かなくなる。

意識がかすみ、少年を睨むことも儘ならなくなる。  
抵抗するにも何に抵抗すればいいのかわからない。  
もがくこともできなくなり、ぐつたりと力をなくした。

ギリギリと首が力で押さえられる。

少年はクスリと笑うと、くるりと俺に背を向けて窓に向かい合つた。

「やはり、能力者と素材じやあ・・・勝ち田はない、ですか」

少年は言葉を残して窓から去ろうとした

正確には去ろうと窓に手をかけた。

ザワリ、ザワリ、ザワコザワコザワコ

バツと振り向き、仰向けに倒れる『玲哉』の体を見る。気のせいか？何か殺氣のようなモノを感じた気がした。背筋が凍りつくという表現はあながち間違っていない。背筋、と言つよりは体中が凍りついて動かない気がしたのだ。

少年が息をつくと、むくりと『玲哉』の体が起き上った。

## ウラの在り様

何が起きた？

「まだ、動けたんですか」  
先ほどの殺氣は？何故、氣絶させた人間が立つ？  
「所詮は能力<sup>デルタ</sup>が使えない素材<sup>リップ</sup>。大人しくしていればよかつたのに、残念ですね」

・違う。

ジトリと汗が手に滲んでいるのはわかっていた。

ハク自身、『これら』が強がりだと言つことも、理解していたのだ。  
形勢は完全に覆された。

思い込もうと口に出す強がりを、体中で否定している。そして、警告をしてくる。

こいつは危ない、と。

目の前で起き上る少年 玲哉は、先ほどとは？違つて？いた。  
先ほどはもつと無力だつたはず、何もできずに氣絶させたはず。なのに起き上つた。

起き上つたときにはもう別人だった。

「くくく・・・あは、ははは、は・・はははーーー！」

不気味な高笑いが、部屋を埋め尽くす。

ハクは目の前で叫ぶように笑う玲哉を見つめ、現状把握を試みていた。

先ほどの玲哉と違うのはわかった。だが、何があつたと言つのだろう

うか。

訳がわからず動搖を隠せずにいると、いきなりハクの体がふわりと宙を浮かび、そのまま壁に叩きつけられる。

「ツ・・・うぐ・・う」

声にならない呻き声が漏れる。視界が霞み、前がよく見えない。壁に叩きつけられ、床へ倒れ込むハクはまるで人形のようだった。抵抗さえできない、する暇を与えない。

ただただ圧倒的な力の差を見せつけられ、全身で絶望を感じる。

「哀れ」

玲哉が呟いた。

ハクは辛うじて意識を保っているようで目を薄ら開けるが、視界が霞んでいるせいで玲哉の顔は見えない。ただ目の前にいる玲哉の声は、先ほどとは違つて鋭く冷たいモノであり、情など欠片も存在しないようだつた。

「哀れな餓鬼がき」

再び玲哉が言った。

その瞬間、体がズツと重くなつた。

うつ伏せに倒れていても体が圧迫されるように重く、呼吸をしているのが段々と辛くなる。

「自分の力を過信し、隙を見せたことを後悔しない」

何を言つていいのだ、と思う。

先ほどまで自分は優位に立っていたのだ。

抵抗の素振りは感じられず、才能も感じることができなかつた玲哉を殺そうとした。

殺せるはずだったのだ。なのに、『こいつ』に邪魔された。『こいつ』は間違いなく別人だ、玲哉ではない。

「我ワタシの器を壊そうとした報いだ、そのまま死ね」

冷たく見下ろす『玲哉』を睨んだ。

圧迫する力が肺を押さえつけ、ハクは呼吸することさえ儘ならない状態だった。

動くこともできず、目の前で不敵に笑う『玲哉』の声を、聞くだけだ。

玲哉はスッと目を細めると、拳を上げた。

その動作だけで、何か来るのは一目瞭然だ。

次、『玲哉』が何かを繰り出すときは、自分は死ぬ。そう直感した。

勝ち目はない、勝てるはずがない。と、ハク自信わかつていた。

苦しそが、呼吸を荒立たせる。

・・・どうせは、捨てた命だ。

そう割り切つて瞼を閉じた。

このままジッとしていれば、『玲哉』が自分を殺す筈だと。

だが、いつまで経つてもそのときは来なかつた。ハクは重い瞼を開けた。

「ハク、大丈夫？」

ニコリと笑うサトの顔が視界に入った。

続いてカナが見える。

カナは能力ではなく、素手で応戦している。

さすがに生身の人間（玲哉）は燃やせないのだろう。

「無事か！？」

カナは『玲哉』の相手をしながらこちらを見る。

ハクは照れ隠しに顔を背け、それから「助けてもらわなくとも、無事ですけど？」と強がった。

「可愛くねエの」と呟くカナを他所に、サトはハクを立たせる。

あの圧迫するような体の重みは既になくなっていた。

サトはハクを支えながら「ハクの気配と一緒に、大きい影の力が感じられたから」と笑う。

正直、命拾いをした。

「しかし、あれは何？影にしては強力すぎる」ロスト

「わかりません。リップ素材を処分しようとしたら、急に？ああ？なつてしまつて」

サトの言葉に、ハクは首を傾げた。

ハク自身も何がどうなつてているのか、何もわからない状況だ。

聞かれても、急に人間が影のようになつてしまつたとしか答えられない。

「あの子が素材？」リップ

「ええ。『さつき』は、ですか」

ハクの言葉が途切れる。ハクの目の前をカナの体が横切ったからだ。ハクと同じように、カナも投げられてしまったみたいだ  
・  
人形みたいに。

「ゲホツ・・ガツ・・」

カナはそのまま倒れ込み、長い間むせた。

カナを追いかけるように、『玲哉』がゆっくりと歩を進める。

ゆっくり、ゆっくり。

その一步一歩が死へのカウントダウンに見えた。

「戯れも飽きた」

『玲哉』がニイツと笑った。その笑顔は、何よりも冷たく残酷に見えた。

「三人まとめて殺す

・・・」

『玲哉』はニイツと笑って口を開く。

だが、そのあとキヨロキヨロと辺りを見回した。

そしてクッと笑うと、「まだ、時期じゃない。糞餓鬼に感謝しろ」と吐き捨てる。

途端『玲哉』は倒れ込み、そのまま動かなくなつた。

三人は呆然と玲哉の体を見つめ、それからふつ・・・と息をついた。

・・生きてる。

命があることに悔やみ、喜ぶ。矛盾しているが、そんな感じなのだ。

「羅刹！――」

何かを叫びながら部屋に入つてくる見覚えのある金髪の青年は、辺りを見回して安堵の息を漏らした。

「無事、だつたんだね」

「オ・・・ナ・・・・・・・・」

力が抜けて、声が思つよつに出ない。

オーナーと呼ばれた青年は、眉を下げて苦笑し「部屋、ボロボロだ」と今はどりでもいじょうなことを言った。

でも、確かにボロボロだ。

この部屋は元々玲哉の寮部屋だが、戦闘の後だからだ  
・・悲  
惨な状況になつてゐる。

「ハク、サト、カナ。すぐ駆け付けられなくてごめんね」

オーナーは深々と頭を下げる。

サトは笑つて「いいですよ」とオーナーを宥めた。

実際、オーナーのせいではない。

全部、不甲斐なかつた自分のせいなのだとハクは思った。

油断したせ이다。

勝つたと思つたせ이다。

だから、隙を突かれた。

ハクはギリッと歯を食いしばる。

「ああ、突然の来客に驚いて、帽子被るの忘れてた」

オーナーはそう言つと、懐から可愛らしいポンポンがついた真っ白な帽子を出して被つた。

カナはそれを見て「いい年こいて・・・と呴いていたが、いつものことだ。

「ん・・・」

玲哉がもぞりと動き、目を覚ます。

「あ、幽霊」

玲哉がぼそりと呟いた言葉は、力ナに向けられた言葉だった。力ナは、玲哉が力ナを幽霊だと思っていると知り、苦笑した。

「あのな？俺は幽霊じゃね？よ」

「じゃあ、何者？炎、操つてたよな。四階建ての屋上に、素手で上つてきたし」

「俺はな　・・」

「そこからは俺が説明するよ」

力ナの言葉を遮ったのは、オーナーだった。

オーナーはその場にしゃがむと、ニコリと笑つて玲哉を見た。

「单刀直入に言つね。キミは素材ロツツで、これからある秘密組織に入らなければいけない」

「は？」

唐突に出たオーナーの言葉に、玲哉は呆然とするしかできなかつた。

## ウラの組織

意味がわからない。

意識がいつの間にかなくなつていて、重い瞼を持ち上げれば見覚えのない人間がちらほら。その中には先ほどの幽霊（仮）も混ざっていた。そしてその隣を見れば、傷だらけになつてている先ほどの少年もいた。先ほどは何故か俺を殺そうと、奇妙な能力を操つていたが、今はその意思はないようだ。無意識に安堵の息を漏らした。

そう言えば、俺を殺そうとしたとき少年が、あの幽霊（仮）を力ナと呼んでいた気がする。

そして、容姿に似合わない、可愛らしいポンポンがついた真っ白な二ツト帽を被る青年が目の前にいる。二ツト帽を被る青年は、俺の目の前でしゃがみ、目線を揃える。

そして、訳の分からぬ言葉を発した。

?キミは素材リップで、これからある秘密組織に入らなければいけない？

「組織・・・？」

「そう、組織だ」

よく見れば俺の部屋がボロボロだった。何かに荒らされたように机が破壊され、壁も大きなヒビが入っている。ここで何があったと言うのだ。

「キミは、どれくらい『ウラ』を知ってる?」

「ウラ?」

「オーナー、この素材は何も知りません」

俺が聞き返すと、傷だらけの少年が青年に付け足しをする。

青年はオーナーと呼ばれているようだ。

先ほどから言つてゐるこの単語　　『リツツ』とは何なのだろうか。

「素材リツツって言つるのは、能力の素質はあるけど、その能力を使いこなすことができない人のこと。そして能力を操り、自分の力として發揮できる人のことを俺らは能力者フロウと呼ぶんだ」

オーナーはまるで心を読んでいるかのように、『リツツ』について簡単に説明をした。

俺は思つていたことが簡抜けになつていて、動搖し、目を瞬かせた。

オーナーはその状況に笑つて、それから言つた。

「キミロストは影ロストが見えるんだね」

「ロスト・・・」

「キミたち、オモテの人間で言つ、幽霊みたいなモノかな？見えてるんでしょう？他の人には見えない、黒く濁んだ、得体の知れない闇のようなモノが」

俺はこくりと頷く。

この人は、俺と同じ『影』を見ている、それらの存在を知つてゐる。それを知つただけで嬉しくなつた。

俺が見ていたからは、本当にあつたのだと証明できるのだから。俺がおかしくなつてしまつたわけではないと、わかつたのだから。

「影ロストは放つておくと空間を崩壊させてしまうんだ。人間が生存することができる、この空間を。まあ、イメージはし辛いだろうけど、後々感覚で覚えていけばいいから」

「あの・・・俺がその、アナタが言つ組織に入らなきやいけないってのは？」

「キミがウラ つまり影の存在を知つてゐる時点で、組織に入るのは必然なんだ」

「その組織つて・・・？」

質問をする声が小さくなるのがわかる。

不安なのだ。今まで俺自身が存在してゐた世界が、今まで知つた世界が 今この瞬間、全ての常識が入れ替わるひつとしているこの事実に。

影の存在は知つていた、もちろん視覚的にだが。

でもそれらがどんなモノで、害を及ぼすかどうかなんて、知る筈もなかつた。

誰も見える人がいないのだから。

だけど今出会つた。

「国に認められたウラの組織 ・・百鬼衆」  
「国に？」

「ああ、国はこの組織の存在を知つてゐる」

と言つことは、俺たち国民だけがそれを知らされていないと語つことだ。

国は影の存在も、不思議な能力の存在も、この組織も、全てを国民に隠している。

良く言えばウラで護られている。悪く言えば 恐りく、都合の良いように騙している。

「オモテの人間が知ることはない会社、百鬼衆。この子たちはその リノード・ライ

社員なんだ

オーナーは、後ろで黙つて話を聞いている、傷だらけの少年、特徴的な髪型の身長の高いカナと呼ばれる男、黒髪の俺と同じ年くらいの眼鏡の少年を指差して笑つた。

「百鬼衆は、影を消すこと目的として存在する組織なんだ。そしてその役割のほとんどを担つていてる能力者に、キミもなれると言つことだよ」

「は？」

「俺らは能力のことを『デルタ』って呼んでるんだけどね。要するにキミは、能力を持つてているんだ。キミを見る限り、まだ覚醒はしていないんだろうけど」

「なんッ・・・そんなことが、わかるん・・・だ」

動搖しているのがわかつた。

要するに、俺はオモテの人間ではない。正確に言うと、俺はその存在を知つてている時点でオモテではなく、ウラの人間になつていたのだ。

無自覺なだけに、動搖が大きかつた。

オーナーは全てを見透かしたように笑うと、俺を見据えて言った。  
「俺たち同業者は、能力を感覚で感じることができる。特に、力を制御ができるキミみたいな素材はね、能力から発する電波のようなモノを無意識に放つてるんだ。だから素材はとても見つけやすいんだよ」

「で、電波ツ！？」

いつの間にそんなモノが出ていたのだ、と無意識に体をこわばらせた。

「キミは素材で、影が見える。ちょっと訓練すれば、すぐ能力を使

いこなせるようになるよ。片方が備わっていることはあるけど、両方は稀にしかいない。さあ、それじゃあ本部に行って早速入社手続きをしようつー。」「

オーナーはぐいぐい俺の手を引っ張つて、俺のことなんか気にしない。

ある意味、自由奔放な人だ。

カナはそれを見て苦笑し、傷だらけの少年は相変わらず俺を睨み、黒髪で眼鏡の少年は呆れてため息をついていた。

「ちょっと待って！アンタ何者！？」

オーナーの自分勝手な行動を制止しようと、言葉で行動を遮つた。オーナーはキヨトンとして俺を見て、それからへラリと笑うと言つた。

「ああ、まだ自己紹介をしてなかつたなあ。俺は百鬼衆リノード・ライアジア支部長、気軽に『オーナー』って呼んでね」  
『オーナー』は多分本名ではない。  
だが、本名を教えてくれる雰囲気でもない。結論として、大人しくそう呼ぶことにした。

「そこで『王立ちしてる大きな栗色の髪の人』が『カナ』、拗ねてる茶髪の男の子が『ハク』で、眼鏡の男の子が『サト』」「  
「拗ねてません」「  
「拗ねてるじやん、むつりしちやつて」「  
ぶツとカナが盛大に吹き、サトと呼ばれた少年も肩を震わせている。ハクは仮頂面が更に険しくなつた。  
オーナーはそんなハクに怯まず、俺を見てクスリと笑つて言った。「さあ、じゃあ行こうか」

えらいことになってしまった。

## ウラの事情

正直、まだわからないことが多いかった。

とりあえず言つておくが、俺は頭が悪い。  
授業に出ていないと言つても大きいが、まず素材がよろしくない  
のだ。

そのため、何を言われても理解できない。

だがそんな俺も理解したことが一つ。

危ないところに足を踏み込んでしまった、といつことだ。

更に言つなり、とても現実離れしたところに足を突っ込んでしま  
た。

しかし、更なる事実。

ウラの世界があるから、オモテが平和であると言つことだ。  
オモテの世界と言つのは、俺が今まで居座っていた平和ボケした場  
所。

そしてウラとこつのは、『影』<sup>ロスト</sup> や『能力』<sup>デルタ</sup> と言つた、現実離れをし  
た常識を持ち得ている世界。

そして俺はそこに踏み込もうとしているのだ。

それは半ば強制であるらしい。

オーナーは、影を見る事ができる人や、能力を持ち得ている素材<sup>ロット</sup>  
は嫌でもウラに入らなければいけないと言つていた。それがウラの  
常識なのだ、と。

そしてオモテにとつては、ウラは絶対に知られてはいけない存在ら  
しい。

俺は両方を生まれつき持つていたのだが、ウラに入る当初は大体は能力はあるが、<sup>ロスト</sup>影を見ることができないという人間が多いらしい。（それか影は見えるが、<sup>リップ</sup>素材ではないという例）

オーナーは、その点では俺は運がいいと言っていた。<sup>デルタ</sup>影は訓練をすれば見ることができるが、能力は訓練をしても手に入れることはできない。

そう言つた人間は、ウラに入った上でサポーターとして<sup>リノード・ライ</sup>百鬼衆で働くらしい。

もちろん資金は国から出るため、お金には困らない。寧ろ働けば収入が多く、裕福な暮らしができる。

命を賭けると言つてもおかしくない仕事だからだ。

「な、なあ。どこ行くんだ？」

「さつきから言つてるじゃん、<sup>リード・ライ</sup>百鬼衆の本部だよ」

オーナーは一コリと笑つて、俺の不安を更なる不安へと変えた。

「いやいや、あの部屋をあのままにしていいのか？」

何があつたかわからないが、気が付いたら酷く荒れていた俺の部屋を思い浮かべた。

人が来たら、大騒ぎになる筈だ。

だがオーナーは笑顔を欠片も乱さず、淡々と言つた。

「大丈夫。『修復』<sup>デルタ</sup>の能力の子に、直すように言つたから。帰る頃には元に戻つてるよ」

「さ、さすが」

さすがウラの組織の人間だ。

対応の仕方も、オモテの常識をことごとく覆していく。

「うるさいですね、黙つて歩いてください」

そう言うハクは、ギロリと俺を睨んだ。

どうしてこうも、ハクは敵意を持つのだろうか。

そう思いながら歩いていると、ふと周りを見渡した。見慣れたところに着いてしまった。

「ん？」 ひて・・・

ここは体育館倉庫だった。

オーナーは何の躊躇いもなく勢いよく倉庫の扉を開けると、中に入つていった。

続いてハク、カナ、サトの順に入つていく。こんな狭い所にどうして入るのだろうか、と思いながらも思い切つて入つてみることにした。

足を踏み入れると、それと同時に埃臭いニオイが鼻の奥まで入り、むせてしまつた。

外とは違つて真つ暗な場所だ。

「倉庫、閉めといて。あとで誰かが来ても厄介だから」 オーナーはそう言つと、ガサゴソと何かをし始めた。

俺はそれに素直に従い、オーナーがいるであろう方向を見つめた。真つ暗なためにオーナーや他の三人は見えないが、何をするのかと耳を澄ましていると、薄ら光が見えた。

その光は外の光ではない。

倉庫の中にあつた古いロッカーの扉の向こうから、光が見えているのだ。

恐らく、オーナーが扉を開けたのだろう。

これで、先ほどよりも倉庫内が見えるようになつた。だが、何故光が？

と、呑気に思つてみると、オーナーはいきなりその中へ入つていつた。

そして、さも当たり前のようにカナとハクも入つていく。

現状に追いついていけず、一人取り残されるのかと思つていゆるが、サトがこちらを向いて苦笑した。

「ここ、本部に通じる門なんだ。<sup>ゲート</sup>他にも場所<sup>ごと</sup>に設置されているんだけどね、万が一オモテの人間が開けてしまつても、見る力がない人には影響がないようになつてゐるから大丈夫なんだ。認識、されないからね」

「へえ」

「初めてだと躊躇つたりするかもしだれだけど、案外平氣になるから」

サトはそう言つてロツカーの中に入つていった。  
氣を遣つてくれたのだろうか？初めて門<sup>ゲート</sup>とやらに入る俺に。

それとも、あまりにも不憫だからと声を掛けてくれたのだろうか？  
どちらにしても、少し氣が楽になつた。

俺は決心をすると、思い切つて飛び込んだ。

「ぐえッ」

ぐえ？何か聞いたことのある声が、苦しそうにしている。  
気付いたら倒れていた。

ゆっくりと起き上ると、下は床ではなかつた。見えるのは  
・カナの背中？

「ちょッ・・お前マジでなんなんだ？早くどけ、苦しい」  
「マヌケですねえ、どっちも」

苦しむカナと、咳くハク。

俺はその咳きを聞いていたが、あえて聞かない振りをする。

「どうやら門に勢いよく入ったため、カナの上に勢いよく落ちてきてしまつたらしい。」

俺はカナの上から降りると、辺りを見回した。

立派な建物だ。

学校の体育館の十倍はあるこの場所も、建物の一部らしい。立派な装飾も、大きく綺麗なこの広場も、何もかもがウラの世界の壮大さを物語つていた。

周りを見て感心していると、突然グニヤリと視界が歪み、吐き気が襲つた。

頭には破裂しそうなくらい圧迫した痛み、劈くような耳鳴り。苦しさで自然と息が荒くなつた。

「どうしたの？」

オーナーが俺の顔を覗くが、オーナーの顔も霞んで見える。

声色はどうやら俺を心配しているようだ。三人の視線も痛く感じる気がする。

「何でも、ない」

「…………ああ、そうだ。そういうえば、キミは門<sup>ゲート</sup>を通るのは初めてだつたね。空間に穴を開けて、空間と空間の間を通るから、初めてだと耐性が足りなくて苦しくなるんだ」

オーナーは思ひ出すように言った。

そう言つことは始めて言つて欲しいよ、と心の中で悪態づくが、苦しさは変わらない。

俺は頃垂れながら、地面に膝をついた。

すると、どこからか声が聞こえてきた。

小さな女の子の叫び声だ。しかし、肝心の女の子がどこにもいない。

声は上から聞こえてくるの ・・・ん? 上から?

「オオオ ナアアア ――――」

「え?」

オーナーは呼ばれた声に呆けた顔で上を見上げると、突然降つてき  
た何かに潰されて倒れた。

オーナーが「ぐぼッ」と不気味な声を出して床に押し付けられると、  
落ちてきた何かは「オコのうさぎちゃんがああ」と嗚咽と共に泣い  
ていた。

・・・落ちてきたのは、前髪にピンをつける小さな少女だっ  
た。  
しかしこの少女が本当に落ちてきたのだるつか。と言つか、どこか  
ら?

疑問に思い、少女が落ちてきた場所を見つけようと上を見上げるが、  
人間が直接降りてこられそうな場所はなく、唯一飛び降りられそ  
な場所は、俺の学校の四階建ての屋上くらいに高っこりだった。

あり得ないあり得ない。

こんな小さくて細い子供があんなところから? 落ちてきて無傷?

「オコ、どこからでてきたの・・・」

オーナーが力なく言つと、オコと呼ばれた少女は先ほど俺が、あり  
得ないだろうと考へた場所を指差し「あそこから・・・」と弱々し  
い声で告げた。

「嘘だろ・・・」

俺は動揺を隠せずに乾いた笑いを零すと、オコはこりりを見て実に

素直に、訝しげな表情を固めた。

オコはオーナーにしがみ付き、それから「不審者」と呟いた。

「え、俺？」

俺はいきなりのことに何を言つたらいいかわからず、とりあえず苦笑した。

すると、遠くから少女が走ってきた。

と言つても、見るからにオコよりもずっと年上で、俺と同じくらいの歳の、やけに細く現実離れした綺麗な少女。

俗に言う美少女。

「すみません、オーナー。オコ、少し目を離したらいなくなつてて・

少女は人懐っこい笑顔を浮かべながら、オコを抱き上げる。

その仕草はもう慣れたモノで、動作だけでこれらは日常茶飯事なのだと言つことがわかつた。

オコは声をあげて無邪気に笑うと、少女にしつかりとしがみ付いた。少女は肩まである真っ直ぐな黒髪を耳にかけると、ふと俺に視線を移した。

俺が視線のやり場に困つていると、少女は一コリと笑つて「新入社員？」と聞いた。

その言葉に反応したオーナーは少しせき込んで、それから俺の背中に手を添えた。

「うん。丁度チームが集まつてくれたことだし、紹介するね」  
この場にいた六人（俺も含めて）が、オーナーに注目した。

「この子はレイ、歳はサト、ミシと一緒だね。レイは今日から、キミたちの十三班に入つてもう少しだ。チームメイトとして、彼にいろいろ教えてあげてね」

「レイ？」

「二二二ではね、本当の名前じゃなくて、ニックネームで名前を呼ぶんだ。それが二二二、百鬼衆の決まりの一つさ」  
ああ、なるほど。何故だかはわからないけど、俺は『玲哉』だから『レイ』なのか。

じゃあ、サト、ハク、カナ、オコも本名じゃなかつたのか。

「ミツつて・・・」

ふとオーナーから出た言葉を思い出し、口に出す。  
すると、オコを抱えていた少女が「私のことだよ」と笑つた。  
ミツと名乗る少女は、同じ年だと語うのに大人のような雰囲気を纏つていた。

落ち着いた口調に柔らかい笑顔。

「十三班つて言つてたよな」

「これからレイは十三班で、百鬼衆の社員として任務を受けるんだ」  
オーナーは二コリと笑うと、俺を見た。

オーナーが笑うところを見ていると、怒ることなんてないんだろうな、と錯覚してしまう。オーナーの笑顔はそれ程安心できる、優しい顔だった。

「百鬼衆の存在理由は知つてるよね」

「確か、影を消すこと・・・だつたよな」

「そう、そしてそれを行うのは、キミたち能力者だ。チームを組んで、任務として本部を離れて遂行する。カナたちがキミの学校にいたのも、任務の為だつたんだ」

「なるほど」

だからカナは炎を操つて、俺が触ろうとした影を消したのか。

「・・あれ、それじゃあカナの能力は『炎』?」

「ああ、まあな」

「ちなみにオコは『読心術』と『身体強化』だ。稀にだけど、能力を一つ持つてる人間もいる。オコはその一人だよ」

「そうなのー！オコは一つ持つてるのーー！」

元気に反応し、自分の話題が出たことに喜んだオコは、その場でとび跳ねた。

さすが『身体強化』の能力を持つオコだ。

とび跳ねる姿は普通の少女と変わりないが、とび跳ねた高さは軽く三メートルを超しているだろう。

そして先ほどの事件も合致がいった。

オコが強靭的な高さから落ちてきたのにもかかわらず無傷なのは、『身体強化』の能力<sup>デルタ</sup>があったからだ。

わかつていても、先ほどのオコを思い出して身震いした。

こんな小さい子があんな高さから落ちてくるのを、目の当たりにする日が来るなんて。

もう一つの能力は『読心術』だと言っていた。

『読心術』って言うと、心を読むと言つことか。

「心を読むのか。何か、恥ずかしいな」

無邪気な少女には変わりないのだが、心の内が見えてしまうとなると少し恥ずかしい。

それを聞いたオーナーは微笑んで、「大丈夫、この子は幼いけど立派な能力者だよ。

能力を操れるから、普段は心を読まない」と言つた。

「オコ？」

ミヅがオコを呼ぶ。

だがオコは、先ほどの元気な動きとは打って変わって、ミツの後ろに大人しく隠れてしまった。

何があったと言つたのだろうか。

オーナーはそんなオコの頭を撫で、「大丈夫だよ、オコ。レイはキミを嫌わない」と安心させるような優しい声色で言った。

オコはそれを聞いて、ミツの後ろから少し顔を出した。

「じめんね。オコ、昔『読心術』で嫌な思いしたことあって」

・・嫌な思い。

俺が生まれつき見えてしまった影。ロスト

それらの存在を周りが既に認識していると思っていたのに、周りは見えていなかつた。

周りの蔑むような、異質を見るような目を見るのが嫌だつた。怖かつた。

誰も自分を『普通』だと見てくれない。『普通』ってなんだ?俺は『普通』にしてるのに。

昔の俺と同じようなモノなのだろうか。

だつたとしたら少し　　・・親近感が湧くな。

俺はオコに近付き、頭を撫でた。オコは驚いて大きな目を見開き、それから俺を見た。

「俺も同じ、だから怖がらないで?」

唐突に紡がれた俺の言葉。だが、オコには多分伝わっていた。

『俺も嫌われるのは怖い、同じだよ』

周りからの視線が怖かった。

でも今は普通にしていられる。

だって、影を見ることができる人を見つけたから。

俺がおかしくなったわけではない。

俺が嘘をついていたわけではないと証明することができたから、安心できた。

『俺はオコを嫌わないから、怖がらないで』

俺はそっとオコに念じる。

オコはハツと俺の顔を見つめると、それからパアツと顔を明るくした。

「レイ、好きい！！」

そのままオコは、俺の懷に飛び込んできた。

・・さすが、『身体強化』だ。

飛び込んだオコは、俺の腹に頭突きを食らわせた。  
姿が普通の弱々しい少女だつただけに、油断していたのだ。  
オコはケタケタと笑い、俺に抱きついた。

俺は腹に走る痛みに耐えながら、顔を青くしながら笑った。

## ウラの危険

「あらま、オコ懐いちゃつたよ  
オーナーが目を丸くした。

俺はオコの頭突きを尚も食らいながら、オーナーに目を向ける。

「オコは知らない人には懐かないんだけどな」

「それほど、レイが良い人だつてことじゃないですか？ オーナー」  
ミツも少し驚いていたが、やがて微笑みを含んだ表情をオコに向ける。

オーナーは「そうだね」と頷くと、ぐるりと俺たちに背を向けた。

「さてと、俺は仕事が溜まつてゐからもう行かなくちゃ。あと、案内と説明頼んだよ」

「はいはい、どうせ仕事なんてしないだらうけど、いつてらっしゃい」

オーナーの言葉に、少し棘を含んだ言葉を浴びせるサトの表情は、冗談を言つているようには見えない。

恐らく、？いつも通り？仕事をしないのだろう。

「んじゃ、説明はサトに任せせる。俺ア眠いからな」

「僕も、レイさんは『嫌い』だから任せます」

「ちよッ・・・嫌いを強調するな」

そう言つてゐる間にも、カナとハクは肩を揃えてどこかへ行つてしまつ。

ミツはそれを見て「ううううううだけは気が合つんだから」と呆れ半分に呟いていた。

残つたのはオコとミツとサト　　・・と俺。

「じゃ、ミツとオコも休んでいいよ。僕が説明しておくから」  
サトは一囃子と笑って、ミツとオコを交互に見る。

「でも」

「ついでに左脚の怪我、治療してもいいかな？」

何か反論を紡ぐとするミツの言葉を遮り、最後の一言を出す。  
ミツは自分の左脚に視線を向けると、そのままサトを見て苦笑する。

「気付いてたんだ」

「うん、最初からね」

「じめんね」

ミツはオコを連れて、カナやハクが去つていった方向に歩きだした。  
そしてそのまま姿が見えなくなると、「さて」とサトは俺の顔を見た。

「どこのから、説明すればいいかな？」

「え、いきなりそんなこと言われても……」

唐突過ぎて、何を聞いたらいいかわからない。

そう思つて戸惑つていると、サトは微笑み、「焦らなくていいよ」と穏やかに言った。

どうしてこうも百鬼衆リード・ライにいる人は、俺と歳が近いにも関わらず大人っぽいのだろうか。

カナやオコは置いておくとして、皆落ち着きがある。

「能力や素材デルタ リップのことは知ってるよね。じゃあ、晴れてチームメイトになつたことだから、僕らの能力を教えておかないとね」

「あ、そうか。そういうえば教えてもらつてなかつたな」

「僕は『幻』の能力を持つんだ」

「『マボロシ』……つてどんな感じなんだ？」

「どんなって……こんな感じ？」

・・なんだこれ。

気付けば視界全体が花畠になっていた。

さまざま色が彩られ、更には太陽まで照り輝いている。サトの姿が見えず、花畠はずつと先まで続いている。

青空は鮮やかに広がり、そこにいるだけで呼吸が軽くなるように感じた。

ちょっと待て。

つい目の前の光景に癒されているが、ここは建物内だつた筈。何故太陽が？

そこまで来て思い出す。

これはサトが創りだした幻だと、見えないがそこにサトがいると。「なるほど、すごいな」

「そう？ そう言つてくれると嬉しいなあ」

やつぱりいた。声はするが、やはり姿は見えない。

サトの声が聞こえすぎて、フッと目の前の景色が跡形もなく消えた。色鮮やかに広がっていた花畠に少し名残惜しさを感じながら、あれらは全て幻だつたと割り切つた。

「オコとカナは知つてるよね」

「ああ、オコは『身体強化』と『読心術』で、カナは『炎』だよな」

「正解」

「…………って、あれ？ 結局、俺の能力ってなんなんだ？」

「それはわからない。時期が来るまでゆっくり待つていれば、いつか発覚するよ」

「俺つて本当に能力者なのかあ？」

何の自覚も持てない俺が、少し心配になる。が、サトはそんな俺の心配をあつさりと覆す。

「大丈夫、素材の気配を間違うわけないよ。ちゃんと、気配を纏つ

てるから

「そりかな」

「うん。それじゃ、ちょっと歩きながら話そつか。広場で立ち話つて言つのも、疲れるし」

サトはそつと、皆が歩き去つた方向に体を向けて歩き出した。俺もサトの後を追い、隣を歩く。

改めて感じるのだが、やはつこには百鬼衆ロード・ライ・・・ウカの組織の

本部と言つだけあつて、馬鹿でかい。

と言つか、ここ日本だよな。

あまりの建物の大きさに呆けていると、サトは微笑みながら口を開いた。

「じゃあ次はハクの能力。デルタ簡単に言えば『念』かな」

「『念』?」

「そう、よく超能力の一種で『念力』つてあるでしょ? その部類に入るとと思つよ」

超能力と言えば、オモテの人間でも知つてゐる。だからイメージをしやすかつた。

「ただ、ハクの『念』はそれだけじゃない。ハクは『念』を固体化させることもできる」

「固体化つて言つと・・・どうこいつことだ?」

「ハクは『念』で遠隔操作もできる。ま、一番わかりやすい例で言えば、遠くにあるモノを浮かばせることができるってことかな?」

「ああ、それなら」

超能力の典型的な例である。

手で触れていないが、モノを浮かばせることができるとこつもの。だが、本当に現実でそれを可能とすることができるなんて、思つてもみなかつた。

・・あ。

ハクに初めて会ったとき、首を絞められた。

何も無いのに、感触だけが首に食い込んでいた。

?あれ?は『念』を固体化させて、俺の首を絞めたのか。

どうりで何も見えなかつた筈だ。

「ハクは百鬼衆リノド・ライ内で有名な、?天才?なんだ。ちょうど十五年前にここにいた、ある先輩と同じように、能力者フロウとして優秀な社員なんだよ」

「ある先輩?」

「俺もあまり知らないんだけど、十五年前いきなり百鬼衆リノド・ライに入社してすぐに、難しい任務に出ることができた先輩がいるんだ。名前はトキ。でも今は生きてるかどうかもわからず、行方不明になつてるんだつて」

「トキ?それもニックネームか?」

「多分そうだろうね。本名は明かしてもいいんだけど、基本ここでニックネーム呼びだからね。ま、この事に関して?だけ?は深く足を踏み込まないほうがいい。百鬼衆リノド・ライのお偉いさんに田をつけられちゃうから」

サトはそこまで言つと、笑つた。

「さ、この話は終わり。次は ・・」

サトが話を切り出そうとしたそのとき、ズズズズズく嫌な音が建物内に響いた。

今歩くこの場所は、ちょうど訓練場だった。

学校よりも数倍広い、体育館のような建物の出入り口にいたのだ。だが、サトは瞬時に俺の手をぐいっと引いて、訓練場の真ん中に走つた。

「ちょっと・・・なんで影が本部内に入り込んだの…？」

サトの顔は動搖で埋め尽くされていた。

それほど、影がここに発生するのが珍しいのか。

サトの問いに答えることもできるわけなく、手を引かれるままに走った。

「困ったな、僕は攻撃型じゃないのに」

訓練場のド真ん中まで俺を連れたサトは、俺に「多分気配を追つて応援が来るはずだから、レイはここで身を守つて」と言つて先ほどまで俺たちが立っていた場所を見つめた。

どうやって身を守ればいいのだろうか。

ズズ・・・ズズズ

嫌な感じがする。頭の中にまで響き渡るような、嫌な音。

脳が必死に警告している。ここから離れる、と。

「しかも、ランクAって・・・何がどうなってんの？」

サトは顔を引きつらせる。その視線の先には、人の形をした影が見えた。

相変わらず『闇』のように真っ暗で、見ていると氣分が悪くなる。人の形をしているが、氣配だけで人間ではないことがわかつてしまつた。

影には無数の煙のような黒いモノが漂っている。

影は俺たちに段々と近づく。ゆっくり、ゆっくり。

ぞわりと背筋に悪寒が走り、足が動かない。

震えが止まらず、頭の血管は冷水が流れているように冷たかった。

多分これが、俗に言つ『パニック』だ。

それでも、それくらい田の前にいる影は恐ろしいモノだと直感して

いたのだ。

『あは、あはは』  
影は声をあげて笑つた。

その声はまだ幼さが残り、とても可愛らしかった。だがそれと同時に、何も感じず無情さを語るように冷たかった。

『死んじやえばいいの』  
何を言うのだ、この影は。  
と言つより、影は喋ることができるのか。

『僕は悪くないのに、退治するの?』

サトは歯を食いしばり、冷や汗を流していた。

頬から顎に汗が伝い、サトの緊張感が俺にもわかつてしまつた。それほどこの影は強く、恐怖を感じてしまうのだ。

『僕を勝手に創り出したくせに、勝手に退治するんだ?』  
人の形をした影の顔は真つ暗で見えないが、多分こいつは笑つている。

楽しそうに、嬉しそうに、元氣に、愉快そうに。

『別に、どうでもいいや』

軽快に笑うと、影は瞬時にサトの腹を殴つた。

まだ距離はあつた筈なのに、一瞬で田の前まで近づいたのだ。サトは不意を突かれたようで、抵抗などまるでなく通り?吹つ飛んだ?。

「ぐ・・あッ・・・」

サトの呻き声を聞くと、『ドガツ』と言つ嫌な音が聞こえた。

見なくても予想できる、今の音はサトが壁に叩きつけられた音だ。俺は息を呑むと、動かない足を無理矢理動かして後退した。

『能力者一匹、片付けたあーっと』

無邪気に喜ぶ影の声は、まるで普通の子供のようだ。だが、その姿と現状は、そんな可愛いモノじゃない。そうだったら

どんなによかつたか。

「ゲホツ・・ガツ・・ハ・・・」

サトは壁に寄りかかり、長い間むせていた。

眼鏡が床に落ち、ボロボロに砕けている。

肺にあつた空気が絞り出されてしまつたようだ。

サトの頭からは血が流れ、頬から顎へと伝わつて服を濡らす。

「サト！・！」

「そこにして・・！」

近寄ろうとした俺を制止するように、サトは声を絞り出した。

「そこ・・は、結界が張つてあるんだ・・非常用の結界・・影は  
入れ、ない・・」

足元を見ると、そこには円陣が描かれていた。

円陣を描く線が微かに光り、俺はその円陣の中に入つていたのだ。  
しかし、一人分が入れるスペースしかない。だからサトは自分を犠  
牲にしたのだ。

『誰と喋つてるのかな?』

影<sup>ロスト</sup>が首を傾げる。

「!?

・・俺が、見えてない?

もしかして、サトは結界に俺を入れただけでなく、幻で俺の姿を消  
しているのか?

サトはニッと笑うと「独り言」<sup>ロスト</sup>と影に言つた。

『あつそ』

影<sup>ロスト</sup>はサトに近付き、寄りかかるサトの頭を足で踏んだ。  
頭が壁に押し付けられている。

サトは苦しそうに呻き、影<sup>ロスト</sup>は狂つたように笑つていた。

サトの口からは血が流れ出し、抵抗するサトの力も段々と弱まつて

いった。

圧倒的な差に、助けに行こうとしていた意思を削ぎ落とされる。弱い自分に苛立ちながらも、体は言つことを聞かない。

でも、このままではサトが

・・・

サトが？

・・・死・・?

「何を・・浮かれて・・」

無意識に口が動く。

「嬉しかったか？<sup>フロウ</sup>同類に会えたことが、そんなに無意識に。

「危険なところに足を突っ込んだのに、か？」

口が。

「死ぬかもしれないのに、か？」

動く。

「滑稽だな」

俺は自嘲気味に笑った。

途端、視界が薄れていった。

\* \* \* \* \*

『そろそろ、終わりかなあ？』

くすりと影<sup>ロスト</sup>が笑う。

サトは頭を踏みつぶされながら、レイを思った。

- ・ そろそろ、能力<sup>デルタ</sup>を使うのも限界が・・・

時間稼ぎにはなったかな？

そろそろ応援が来るかな？

サトは思考が曇気になりながら、レイが助かる」とを望んだ。

そしてサトは自らの能力<sup>デルタ</sup>を解く

- ・ お、正確には？ 解けた？。そして、抵抗していた体の

力を抜いた。

『あれ、弱つちいの』

影<sup>ロスト</sup>はつまらなさうに口を尖らせ、ぐるりと踵を返した。

『あ、もう一匹見つけ』

影の視線の先には ・・円陣の中で座り込むレイの姿だった。

サトの『幻』が解けたため、姿が露わになつたのだ。  
顔を俯かせ、微かに震えている。表情は見えないが、泣いているの  
だろうか。

『結界か、忌々しいなあ』

影<sup>ロスト</sup>はそのまま、レイに歩み寄つた。レイは相変わらず俯いたままだ。  
サトはしまつた、と思いながらも、体を動かすことができずにドサ  
リと倒れ込んだ。

『遊んでよ』

影<sup>ロスト</sup>の子供らしい声に、レイはピクリと肩を揺らす。  
影<sup>ロスト</sup>は反応したことに喜び、『あは』と楽しそうに声を上げた。

レイはそれを聞き、ゆっくつと  
顔を上げた。

表情から感じられるのは、レイが抱いている筈の恐怖を感じられない  
い  
・・完全な怒り。

## ウラの世界

サトは薄れる視界をなんとか保ちながら、結界の円陣の上に座り込むレイを見つめた。

「なんだ、これ」

声にならない声を口から絞り出すと、体中の痛みがサトを突き刺す。痛みに耐えながら、レイの気配を探つた。

・・なんで、レイから影の気配が・・?

レイが目の前にいるAランクの上級影を睨んでいる。

多分、サトがボロボロに倒されてしまったから。

だが、そのレイから、今までに感じたことのない膨大な影の力が溢れでている。

それこそ、Aランク以上の。

目の前で笑う影は、それに気付いていない。

もともと影に気配を読み取る機能はないから。

だが、能力者は違う。影や能力の気配を間違えないように、訓練して戦場に立つのだ。

『ねえ、遊んで?』

可愛らしい無垢な子供の声で、影はレイの目線に揃えるよつこじゅやがむと言った。

レイは反応せず、ただ黙つて影を睨みつける。

その動作でさえ嬉しそうに、影ははしゃぐ。

『それじゃ、結界を壊しちゃおつかな?』

影は待ち切れずに立ち上がり、一歩後退した。

攻撃を繰り出す間合いをとるためにだ。

このままではレイが危ない。

サトはそつ感じ、動こうとする。だが、痛みがそれを邪魔する。

ふいに声が聞こえた。

「よくも」

レイから発せられた言葉だった。

「よくもサトを」

『はあ？ 何々、怒ってるんだ？』

レイの雰囲気が徐々に変わる中、影は尚も馬鹿にしたよつて嘲笑つ。

「怒ってる？ そうだね、怒ってる」

レイは声をかみ殺して笑つと、一イツと頬を釣り上げた。

「だから、消してやるよ」

ザワリ、ザワリ

雰囲気が変わつた。

ここは建物の中だと黙つて、生温かい風がサトの頬を撫でる。風はレイを中心になぞらつた。気配もレイを中心に渦巻き始めている。

レイの不気味な笑顔は、さつきまでのレイじゃない。

ザワリザワリ、ザワリ、ザワコザワコザワコ

・・・

嫌な感じだ。

直感と言つてはそれまでだが、これらはレイの意思ではないのだと思つ。

『何？ この感じ、お前・・なにも

・・』

『の』とこう言葉と同時ださう。

レイは影を掴みあげていた。

もちろん、素手では大したダメージは与えられない。人間とは違う。だが、それでも影は予想以上に動搖していた。

『離せ、離せ！』

影はレイの腕を千切ろうと、そこらじゅうから溢れ出る『闇』で腕を包みこんでいたが、何があつたのかそのままジタバタと暴れるだけだった。

レイの瞳が黒から鮮明な紅に染まる。真っ赤なその色は、まるで人間の血の色だった。

「愚かな」

影が暴れる中、尚も平然に片手で持ち上げるレイは、小さく呟いた。  
「弱小の分際で、ワタシの器に手を出すなど……」

そして怪しく笑つた。

「身の程を知れ」

そのまま影を掴んでいた手を、ギュッと握り潰す。

途端に影は煙と化した。

シューウウウと空中に漂い『くそつ、人間に負けるなんて』と吐き捨てて消え去つた。

「人間？」

レイは何も無くなつた空間を見つめ、言つ。

「ワタシの名は羅刹、あんな弱小の生き物と一緒にするな」

「ら、せ・・・つ」

サトは声を振り絞る。

まだ体中痛いが、先ほどよりは楽になつたようだ。

『羅刹』と名乗るレイは、サトに視線を向ける。

レイはサトが知つている限り、目つきがまるで違う別人だった。

サトは身をよじらせ、体を起こす。

「また会ったな、小僧」

ハクがレイに会いに行つた時も、オーナーが部屋に入る際に？羅刹？と呼んでいた。

オーナーは？羅刹？の正体を知つてゐるのだ。  
そして、恐らくこれも先ほどと同じなのだろう。

「おまえ・・・は、なに・・・も・・の」

「それを知るにはまだ早いな」

レイは即座にそう切り返すと、静かに崩れ落ちた。

「サト！？」

オーナーの声が聞こえた。

だが、サトの体にも余裕は出ず、そのまま意識を失つた。

\* \* \* \* \*

「…………」

サトの声が聞こえ、俺はすぐさまカーテンを勢いよく開ける。

「あれ、レイ・・・　ツテ」

サトは俺の顔を見て起き上りうつとし、まだ体が痛むのかベッドに再び倒れ込んだ。

「「何は？」

サトの視界に入ったのは白。

カーテンの白、シーツの白、視界に入るモノは何もかもが白だった。  
「本部の病院・・・だって、オーナーが言つてた」

「そつか」

病院と聞いて納得する。

すうつと息を吸うと、病院<sup>フロア</sup>独特の薬品のニオイがした。

本部の病院は、一人前の能力者<sup>デルタ</sup>が揃っている。

ここで多いのが『治癒』の能力を持つ人たちだ。

だが、ここの人間は戦闘能力にも長けていため、安全なのだ。

「よかつた・・・！死んじゃったのかと思った・・・」

俺は心底安心し、はあ・・と深く息を吐きだした。

「ごめん、役に立たなくて・・・」「ごめん、ごめん・・」  
俺は歯を食いしばると、サトが殺されかかっている映像を脳裏に浮かべる。

動け、動け。

そう念じるのに、まるで動けないとしない俺の足。

怖いのか？恐ろしいのか？

何の覚悟もないくせに、平穀な日常ではない『特別』な立ち位置に立てたことを喜んだ。

その結果がこれだ。

怖くて怖くて、行動に移せずにいた。

目の前でサトが死にそうなのを目に見て、尚自分で助かるうとしていた。

安全な結界の中で、サトが影<sup>ロスト</sup>を倒してくれるだらうと割り切って、サトに助けてもらっていた。

「ごめんッ・・・

唇を噛むと、口に鉄の味が広がった。

自分でも気付かない内に、強く噛んでいたのだらう。

それでも自分の悔しさは消えない。

俺は強く強く拳を握った。

サトはそれを見て、ニコリと笑つて俺の頭を撫でた。

「最初は誰だつて怖い、動けない。だから、強くなろうと必死になつたんだ」

「ツ・・・

「俺も同じよつて、オーナーに助けられて生きてる」  
目頭が熱い。

氣を許したら、雲がすぐにでも零れ落ちそくなぐらい。  
歯を食いしばる表情も、震えてる。

「だから、責めないで」

同じ年とは思えない。どうしてサトはこんなにも強いのだろうか。

何度も死にかけたから？命がけだから？

命を失くしかけたことがない俺は、サトがわからない。  
だけど、これからは違う。

もし、もしも　　・・・これから先、護りたいモノを護る時は、全  
力で。

「　　・・・　ありがとう・・・

鬪えるかな。

「俺、オーナーたち呼んでくるツ

涙を見せたくないくて、俺は逃げるよつて病室を飛び出した。

「　　・・・　レイ

サトはレイがいなくなり、誰もいない病室で一人呟く。

「君は何者？」

・・・それがな、一瞬だが・・大きな影の氣配がしたんだ。

カナが言つていた。

カナがレイに出会い、サトがカナに状況を聞いていたとき。ハクにレイの場所に向かわせたそのあと、カナが不安そうにサトに言つたのだ。

\* \* \* \* \*

「影の氣配？」

「そう、ただし一瞬だ。一瞬で、消えちまつた」

カナは考え込むように唸つた。

「ただなあ、素材リップとしては結構すげエし、おまけに影ロバートも見える、と。そんな奴、殺しちまうのも、放つておくのも惜しいだろ？」

\* \* \* \* \*

確か、そう言つていた。

そして、サト自身も感じた。大きく、圧倒的な影の氣配。

そして現に、Aランクの影ロバートを言葉通り一捻りで潰してしまった。

多分、レイによる行動ではない。  
些細なことで涙を流す彼が、あんなに残酷な笑みを零せるわけがない。そう思つている。

ロスト

あのとき、影を捉えたときに見えたあの笑顔は、正直背筋が凍つた。

「君は・・・」

独りでに呟いた。

疑問は消えない。

そして、少年を中心にウラは姿を変え、少年もまた、ウラによつて運命が変わっていた。

ぐるぐるぐるぐると運命は変わり、少年はそれらに翻弄されながら生きる。

それはまた次の話になるのだが。

## ウラの世界（後書き）

「ここには、れんです。

ここまで読んでください、ありがとうございます。

『なんとか山のなんとか様』同様、『繋ぐモノ』もまた文章力がない私には難しいです。

能力の表現とか、難しそぎます。

…と、ちょっとした弱音はさておき。

言葉の整理をします。

リンド・ライ  
百鬼衆

ウラの世界の、大きな組織。

デルタ  
能力

人間が普段持ちえることのない力。

フロウ  
能力者

デルターを操ることができない人間。

リック  
素材

デルターを操ることができない人間。

ゲート  
門

空間と空間を繋ぐ出入口。

ロスト  
影

一見『闇』に見える、真っ黒な煙のようなモノ。

サトは人の形をしたロストを? Aランク?と言つている。

次回からは、上記の言葉を一回目以降、()内の言葉だけで表します。

何かと面倒くさいので(笑)

さて、何故がまた謎っぽいのが出てきたぞ(笑)  
どうしてこう、私が書く文章は...!!  
人物もじつぢやりしてきたので、整理。

レイ(樋田 玲哉)

主人公。ロストが見える以外は、多分普通の男子高校生。

オーナー

年齢不詳、多分20代。

金髪で、可愛らしいボンボンがついた白いニット帽を被る青年。

普段は滅多に怒ることがない、温和な人。

デルター不明。

カナ

レイより歳がちょっと上の少年。

背が高く、特徴的な(左側の髪の毛を後ろにやり、ピンで止めると  
いう)髪型で、栗色の髪をしている。  
『炎』のデルターを持つ。

サト

レイ・カナ・サト・ミツ・ハク・オコ  
十三班で一番の常識人。

レイと同じ年で、眼鏡と黒髪が特徴。  
『幻』のデルターを持つ。

ハク

誰にでも敬語を使う、ひねくれ者。

茶髪の髪が特徴で、リノド・ライでは？天才？と呼ばれる。

『念』のデルターを持つ。

オコ

チーム内で一番幼い少女で、前髪をピンで止めている。明るい性格で、チームメイトとオーナーに懐く。フロウでも珍しい、二つのデルターを持つ。

『身体強化』と『読心術』のデルターの持ち主。

ミツ

肩まである真っすぐの髪が特徴。

細い体つきに、眉目秀麗と言える顔は俗に言つ美少女。デルターはまだ明かされていない。

優樹

レイの親友。超お人よしで、好奇心旺盛。

トキ

?天才?と呼ばれたフロウ。行方不明で、何もかもが謎。

… ッヒ、こんな感じですかね？

オーナーは謎が多いです。

いい年こいて、ニット帽なんか被っちゃってます。夏でも冬でもお構いなしです。

優樹もこれからいっぽい出していきます。

トキは… 多分出ると思います。

これからも「繋ぐモノ」を、よろしくお願ひします。・・・

それでは、これからも『繋ぐモノ』を、よろしくお願ひします。・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4342y/>

---

繋ぐモノ

2011年11月17日21時37分発行